

保育者養成における自己理解の取り組み

—短期大学でのエゴグラムを用いた心理教育実践—

伊 東 里 容

Efforts on self-understanding in training of nursery teachers

— Practice of Psychological Education using egogram at a junior college —

ITO Riyo

キーワード：保育者養成、自己理解、エゴグラム

I. はじめに

近年、女性の社会進出に伴い、待機児童や保育施設の不足などが社会的な問題となっている。それと同時に保育者の待遇改善や保育をする人員の確保も問題として論じられるようになってきた。現代の保育者の仕事は、目前の子どもの保育をするだけでなく、保護者対応や他機関との連携、資料作成など多岐にわたる。そのため、子どもを保護し、世話をするという能力だけではなく、冷静な判断力や事務作業遂行能力など様々な能力を求められる専門的職業である。そのような多様な能力を求められる職業のため、その養成課程においても様々な取り組みが必要になる。

A短期大学では、現場感覚と実践力のある保育者養成を目指し、発達や幼児教育などの専門的な知識を身に付けられるようなカリキュラムが組まれている。また、実習では学生一人ひとりに担当教員がつき、事前準備や振り返りなどのサポート体制が整っている。

筆者はA短期大学にて教育心理学の授業を担当し、その中で保育者に求められるパーソナリティ特性について考える授業を行ってきた。その授業の中で、保育者にはどのような性格の人物がふさわしいのかについて、後藤（守）・後藤（恵）・金澤・高久（2001）の調査を紹介した。後藤らは、

パーソナリティ・テストの一つであるエゴグラムを用い、現役保育者に、これからの保育者に大切な特性とは何かを尋ね、その結果、NPとAが同程度で最大になる人物像が選択される傾向にあった。（高村ら、2009）エゴグラムとは、アメリカの精神科医エリック・バーンによって創始された交流分析の考えに基づき作成されたパーソナリティ・テストである。人の心の働きをCP（批判的な親）・NP（保護的な親）・A（大人）・FC（自由な子ども）・AC（順応した子ども）の5つの部分から捉え、どの自我状態が優勢なのかに着目しパーソナリティを検討するものである。

筆者は、医療・教育現場でも広く用いられている新版 TEG - II という性格検査を使用し、学生がそれぞれ自分のエゴグラムを作成し、実際にパーソナリティ分析を行う授業を実施した。これにより、保育者に求められるパーソナリティ特性を机上の知識として学ぶだけではなく、現在の自分のパーソナリティ特性との比較を行い、自己理解を深めた。このような自己理解は、自分の得意、不得意などの特性を理解することとなり、これから保育者としての道を歩んでいく学生にとって非常に重要なものとなる。また、自己理解を経て、自分に合った職種や職場環境を選択することにより、保育者自身の自己実現に繋がると考えられる。このように自己実現を達成し、生きいきと働く保育者に保育されることは子どもたちのより良い成長を促進することにもつながる。

そこで、本研究では短期大学における保育者養成において、自己理解を促す取り組みが学生にとってどのような有用性をもつか検討したい。

Ⅱ. 方法

【調査協力者】

A 短期大学幼児保育学科にて教育心理学を受講していた学生 43 名であった。

【調査方法】

授業内で「保育者として活動している時の自分について答えてください」と教示し、新版 TEG - II を実施した。エゴグラムを作成後、その結果の見方について説明し、先行研究で指摘されている保育者に求められるパーソナリティ特徴について説明を行った。そして、授業の最後に調査の目的と論文執筆の意向を説明し、「新版 TEG - II による自己理解」について自由記述方式のアンケート調査を行った。なお、アンケートへの協力は任意であり、協力の有無が成績評価へは一切影響しないことを書面と口頭にて伝えた。

【調査項目】

- (1) 保育者として活動する時の自分について、エゴグラムを使用して考えてみて、どうでしたか。
- (2) 保育者に求められるエゴグラムの特徴について聞き、どう感じましたか。
- (3) 今回のこの体験（エゴグラムを使用した自己理解）は、これから保育者として働く上でどのように役立ちそうですか。

Ⅲ. 結果

【分析方法】

回収したアンケート用紙に記述された文章を一覧にした結果表を作成し、その内容から新版 TEG - II によって作成されたエゴグラムによる自己理解に伴って学生に心理学的にどのように意

味のある体験が起こっているのか分類を行った。各質問項目において、内容の性質が近いもので回答カテゴリを作成し、さらにその内容について分析を行った。分類の際、項目としては代表的なものを掲出し、類似のものを含めた。

【回答内容】

1. エゴグラムを用いた自己理解について

「保育者として活動する時の自分について、エゴグラムを使用して考えてみて、どうでしたか」という質問項目に対する結果は表 1 の通りである。

最も人数の多かった回答カテゴリは、【自我状態の把握】で、24 人が回答しており、回答全体の 55.8% であった。具体的には、「今の自分の特徴がわかったので良かった」（14 人）と自分自身で自覚していたパーソナリティ特徴を、エゴグラムを通して改めて確認していた。また、「自分で気づけなかったことや、悪い点も知れてよかった」や「（自分では）思っていなかった結果も出ていて驚いた」（5 人）などと自覚していたパーソナリティ特性以外に自分の新たな側面を発見する機会となった学生もいた。さらに「自己分析する機会は少ないので自分について知ることができてよかった」（5 人）などと自分の現在の状態について分析し、理解する機会を得られたこと自体を歓迎する学生もいた。このように、この【自我状態の把握】カテゴリでは、エゴグラムという視覚化された媒体を通して、自分という人間と客観的に相対することにより、自分らしさの再確認や新たな発見がもたらされていることがわかった。

次に人数の多かった回答カテゴリとしては、【進歩の獲得】で、12 人が回答しており、回答全体の 27.9% であった。具体的には、「自分の性格の特徴が分かり、長所・短所を見つけることができたので、もっと伸ばせる部分など意識するきっかけになったと感じた」（6 人）とエゴグラムによる自己理解が、自分をより高めようとする動機づけになっていた。また、「自分の 5 つの部分のバランスについて知り、これから伸ばしていきたい部分がみつけれられた」（3 人）などエゴグラム

に表現される自身の自我状態から、具体的に直したい部分を検討する学生もいた。さらに「自分をよく理解して、保育を行えるようにしたいと思った」（2人）とエゴグラムを通じて自身と向き合うことにより、これからの自分の保育者としての働き方を考えるきっかけにもなっていた。この他にも「保育者としてこの項目は大切だなと思うところがあった」（1人）とエゴグラムの各特徴を通して保育者としてどのようなことが必要か検討する学生もいた。このように、この【進歩の獲得】カテゴリでは、エゴグラムによってこれから保育者として本格的に活動するに学生に、より高みを目指す動機づけや具体的な改善点、働き方の意識変化など、現状の自分よりももう一歩前進するためのきっかけがもたらされていることがわかった。

3番目の回答カテゴリとしては、【検査への疑問】で、4人が回答しており、回答全体の9.3%であった。具体的には、「はい、いいえで答えたので、自分の本当の姿とは少し違うものになっているところもあると思う」（1人）、「エゴグラムの結果を鵜呑みにするのは少し違うと感じた」（1人）など、質問紙法による自己分析自体への疑問であった。このように、【検査への疑問】カテゴリでは、これまでの自分の保育活動が質問紙法やエゴグラムのような数的なもので果たして表現されるのか疑問に感じる学生が存在することがわかった。

最後に、回答欄が空白の無回答は3人であり、回答全体の7.0%であった。

表1. エゴグラムを用いた自己理解について

回答カテゴリ	人数（人）	割合（％）
自我状態の把握	24	55.8
進歩の獲得	12	27.9
検査への疑問	4	9.3
無回答	3	7.0

2. 保育者に求められるパーソナリティ特徴について

「保育者に求められるエゴグラムの特徴につい

て聞き、どう感じましたか」という質問項目に対する結果は表2の通りである。

最も人数の多かった回答カテゴリとしては、【知識の獲得】で、17人が回答しており、回答全体の39.5%であった。具体的には、「かなり求められる能力が高いのだと改めて思った」、「NPとAが求められると聞いて保育をするのに大切なことが多いと思った」（7人）など保育者に求められるとされる特徴が保育をする上で大切なことを自身の経験と照らし合わせ、納得していた。また、「保育者に求められているパーソナリティがわかり、自分が保育者になる為の参考になった」（7人）と保育者に求められているものを知ったことでこれから保育者として働く上での指針を獲得していた。さらに「2つを伸ばすことは難しい、大変」、「求められていることが多いと思った」（3人）などと実際の保育活動を想定した時に、求められていることを実行することが困難に感じている学生もいた。このように【知識の獲得】カテゴリでは、先行研究で指摘されているような保育者に具体的に求められるものという知識を獲得することにより、自身の保育活動の経験と照らし合わせて保育者という職業について検討したり、保育者として働く際の指針を吟味したりするきっかけがもたらされていたことがわかった。

次に人数の多かった回答カテゴリとしては、【自己比較】で、16人が回答しており、回答全体の37.2%であった。具体的には、「私はAが足りなかったので成長させようと思った」（8人）など先行研究で指摘される保育者に求められる特徴と自分のエゴグラムを比較することで、具体的な改善点を見出していた。また、「保育者として、“A”の冷静な判断は大切だと思うから、高めていきたい」（6人）など保育者として求められる特徴が示されたことで、理想的な保育者像が明確となり、それを目標として自分自身を高めたいという動機づけのきっかけとなっていた。さらに「…自分は（保育者に）合っているなと思うこともあった」（1人）、またその逆に「求められる特徴について、どちらかというと低いので、なかなか

か保育の現場には適応できないだろうと感じた」(1人)と求められる特徴と自分の特徴とを比較することで、保育者という職業への適性を検討する学生もいた。このように【自己比較】カテゴリにおいては、保育者に求められる特徴というものを知ることにより、その目標となる存在と自分自身を比較することによって、保育者としての自己点検のきっかけとなっていたり、自己向上の動機づけが高まったりすることがわかった。

3番目の回答カテゴリとしては、【他特徴の重要性】で、5人が回答しており、回答全体の11.6%であった。具体的には、「FC・ACも協力して保育をしていく上では大切なことではないかと思った」、「子どもと関わる上ではNPとAは大切だと思うけど、保育者同士・保護者と関わる時は他のことも必要だと思った」(5人)など先行研究で指摘されている特徴だけではなく、実際の自身の保育活動の経験から考える他の特徴の重要性を指摘していた。この【他特徴の重要性】カテゴリでは、学生が子どもに対する対応だけではなく、同僚との関係や保護者との関係など広い視野で保育者という仕事について捉え、検討していることがわかった。

最後に、回答欄が空白の無回答は5人であり、回答全体の11.6%であった。

表2. 保育者に求められるパーソナリティ特徴について

回答カテゴリ	人数(人)	割合(%)
知識の獲得	17	39.5
自己比較	16	37.2
他特徴の重要性	5	11.6
無回答	5	11.6

3. 保育者として働く上でのエゴグラムによる自己理解の有用性について

「今回のこの体験(エゴグラムを使用した自己理解)は、これから保育者として働く上でどのように役立ちそうですか」という質問項目に対する結果は表3の通りである。

最も人数の多かった回答カテゴリとしては、【向上の手がかり】で、20人が回答しており、回

答全体の46.5%であった。具体的には、「自分の足りない部分がわかったので、その部分を成長させようと思った」(14人)などこれから保育者として働く上で、具体的に自分のどの部分を改善していけばよいのかを理解するきっかけとなっていた。また、「良い面と悪い面がわかるので直しやすいと思った」、「自分の長所・短所が目で見えてわかるので、どう活かしていくのかを考えられると思った」(4人)などエゴグラム特有の長所短所がわかりやすいことにより、自分の良さを大切にしながらも、改善点を見出すことができ、活用しやすいことが指摘された。さらに「理想の保育者を目指したいと感じた」(1人)、「保育者に求められる特徴を理解し、そこを伸ばしていくことでよりよい保育者に近づけると感じた」(1人)とより良い保育者になるための前進へとエゴグラムを活かそうと考えている学生もいた。このように、【向上の手がかり】カテゴリにおいては、エゴグラムを使用した自己理解により、自分の良さを活かしながらもより良い保育者になるための改善点などを獲得していることが窺えた。

次に多かった回答としては、【自己理解型就業】で、9人が回答しており、回答全体の20.9%であった。具体的には、「自分の特徴を常に理解することが意識できるなと思った」、「自分の事を考えて行動する」(9人)などの回答があった。このように、この【自己理解型就業】カテゴリでは、エゴグラムを使用した自己理解により、自分の特徴について意識しながら働くことが可能になることがわかった。

3番目の回答カテゴリとしては、【コミュニケーション・スタイルの見直し】で、8人が回答しており、回答全体の18.6%であった。具体的には、「保育者同士、保護者と関わる日常の中でたくさん必要だと思うので、知っておくべきだと思った」(4人)など同僚や保護者など大人との接し方を考えるきっかけになっていた。また、「子どもとの関わり方について改めて考えや思いを見つめ返そうと思った」(3人)など子どもへの接し方を考えるきっかけにもなっていた。さらに

「自分について見つめ直すときとかに役立ちそう」（1人）などと自分について振り返る際にも役立つと答える学生もいた。このように、【コミュニケーション・スタイルの見直し】では、エゴグラムを使用した自己理解により、保育者として他者と接する際の自分について見直すきっかけをもたらすことがわかった。

この他にも【道具的利用】カテゴリーとして、1人が回答しており、回答全体の2.3%であった。具体的には、「履歴書等を書く時、書きやすくなるのではないかなと思った」と、エゴグラムによって示された自身の特徴を履歴書などで自分を表現しなければならない機会に利用することが可能であることが指摘された。

また、【事前準備】カテゴリーとして、1人が回答しており、回答全体の2.3%であった。具体的には、「努力すべき点を得られるため、事前に知識を入れておくことができるといった」と求められる特徴を知っておくことで、自分との比較により事前に知識を学んでおくなど準備が行えることが指摘された。

最後に、回答欄が空白の無回答と文章未完結による分類不能は4人であり、回答全体の9.3%であった。

表3. エゴグラムを用いた自己理解の有用性について

回答カテゴリー	人数（人）	割合（％）
向上の手がかり	20	46.5
自己理解型就業	9	20.9
コミュニケーション・スタイルの見直し	8	18.6
道具的利用	1	2.3
事前準備	1	2.3
分類不能・無回答	4	9.3

IV. 考察

1. 保育者養成における自己理解の取り組み

（1）エゴグラムを用いた自己理解について

エゴグラムを用いた自己理解の取り組みにより、半数以上の学生に自分らしさの再確認や自分の新たな側面の発見がもたらされる【自我状態の把握】

が起こっていることがわかった。また、約3割の学生に現状の自分よりももう一歩前進するためのきっかけがもたらされる【進歩の獲得】が起こっていることも明らかとなった。

このように、これから職種や就職先を選択する“学生”という時期に【自我状態の把握】の機会をもつことにより、自分がどのようなパーソナリティ特性をもっているのか、自分らしさとは何なのか、どのようなことが得意・苦手なのかを把握することにつながり、十分に自分の力を発揮しながら働くことができる環境を選択していくことが可能になると考えられる。また、自己理解から発展して、もう一歩前進するための【進歩の獲得】により、今後の保育者としてのステップアップにもつながると考えられる。

つまり、エゴグラムを用いて客観的に自分と向き合うことは、学生にとって現在の自分やこれからの自分について考える機会をもたらす、現実的に保育者という専門的な職業について捉えることにつながっていると考えられる。

また、エゴグラムを作成するための新版 TEG-IIは集団で実施することが可能であり、多数の学生に対してより効率的に自己理解を促すことができる。そのため、授業という学生にとってはごく日常的な場面で自己理解の取り組みを自然に取り入れることが可能になる。しかし一方で、これまでの自分の保育活動が質問紙法やエゴグラムのような数値的なもので表現されるのかという【検査への疑問】を感じる学生も存在した。そのため、エゴグラムなどの数値に表されるものだけが全てではないことを丁寧に説明し、学生それぞれの思いや考えなどの質的な情報も一緒に扱うような、個別性の高い自己理解促進の機会も同時に設けられることが望ましいと考えられる。

（2）保育者に求められるパーソナリティ特徴を聞いて

保育者に求められるとされるパーソナリティ特徴を聞いて、自身の保育活動の経験と照らし合わせて保育者という職業について検討したり、保育

者として働く際の指針を吟味したりするきっかけがもたらされる【知識の獲得】、目標となる存在と自分自身を比較することによって、保育者としての自己点検のきっかけ、自己向上の動機づけが高まる【自己比較】が起こることがわかった。

先行研究の知見を通して、実際の現場ではどのような保育者が求められているのかという【知識の獲得】をすることにより、学生の中でこれまで漠然としていた“どのような保育者になりたいか”ということが明確化されていったと考えられる。さらに先行知見と【自己比較】する中で自分の理想とする保育者を目指す道のりが具体化されていったと考えられる。

保育者という職業において求められる特徴では、エゴグラムにおいてNPで表される子どもを保育する側面に目が行きがちになるが、先行知見を紹介したことにより多くの学生の中で、Aで表されるような冷静な判断力や業務遂行能力が求められることを改めて認識する機会になっていた。また、さらに考えを進めて、同僚との関係や保護者との関係などもっと広い視野でこの仕事について捉え、【他特徴の重要性】を指摘する学生もいた。これは、授業やこれまでの実習・ボランティアなど様々な経験からそのような視点をもつに至ったと考えられる。子どもとの関係だけではなく、子どもを取り巻く環境との関係性というコミュニティ的視点から保育者という職業を捉えているのである。このようなコミュニティ的視点は環境との関係を良好にし、保育活動をより円滑に行うことに役立つと考えられる。

このように先行知見を紹介したことにより、保育者という専門的職業に必要なものは何なのかをそれぞれの学生が考える機会となった。保育者は子どもや保護者、同僚など様々な人間関係の中で活動しなければならない職業であり、パーソナリティの中でも温和さや冷静さなど様々な側面を求められることが多い。そのため、どのようなパーソナリティ特性を持っている人物が保育者という職業に適任かということは一概には言えないであろう。しかし、自分のどういう側面が活かせるか、

どのようなところに気をつけなければいけないかなど、その時々を検討することができることが望ましいと考えられる。そのためにも、保育者という職業に必要なパーソナリティ特徴はどのようなものかということを検討する機会を得られたことは学生にとっても有益であったと考えられる。

(3) 保育者として働く上での有用性

エゴグラムを用いた自己理解により、自分の良さを活かしながらもより良い保育者になるための改善点などを獲得するという【向上の手がかり】が得られる点で働く際に役立つと感じた学生が46.5%いた。エゴグラムの特徴として、それぞれの性格特性に良い点と悪い点が両方あり、自分の良い所も悪い所もわかるようになっている。そのため、これまでも自分なりに良いと思っている自分らしさは大切にしつつ、改善したい部分を検討することが可能となる。また、今回は先行知見の紹介もしたため、比較対象もでき、どのような点を自分が改善すると良いのかが明確になったのではないかと考えられる。そのため、多くの学生が、自分らしさを大切にしつつ、より良い保育者になるための改善点となる【向上の手がかり】を獲得したのであろう。そして、このようにして得られた自分の特徴について意識しながら働くことが可能になる【自己理解型就業】も働く上で役立つとしている学生もいた。さらに考えを進めて、自分の特徴から保育者として他者と接する際の自分の【コミュニケーション・スタイルの見直し】を検討する学生もいた。これらは、長所短所含めて自分について理解した上で働くことに意味があると学生が認識しているということであると考えられる。

ではなぜ、保育者として自分について意識しながら働くことが重要なのか。保育者という職業は、常に人間と相対する職業であり、時には自らをさらけ出して相手に向き合わなければならないこともある。そのため、自分にはどのような側面があるのか、自分はどのような人間なのかを理解しておくことは非常に重要である。また、どの保育者も何かしらの組織に所属し、周囲の人や環境という

コミュニティと協働して、子どもたちを保育していく。その中で、自分の得意なことや自分らしさとは何なのかを知っておくことにより、自分が力を発揮する機会を見出したり、他者を援助したりする機会がうまれる。このようにして、個人の自己理解により、コミュニティの相互援助機能が高まるのである。

今回の調査結果では、多くの学生が自分について意識しながら働くことが就業上役に立つことを理解しているようであった。これは、これまでの実習経験や友人関係、アルバイトなどの様々な経験から“コミュニティと自分”の関係を見つめる作業を通して、自分がどう振る舞うことがコミュニティと上手く付き合うことができるのかを理解してきたからであると考えられる。このようなコミュニティ感覚をもっていることは、環境と調和しながら、自分の力を発揮するために非常に重要である。

2. A短期大学の学生における自己理解

学生の時期における自己理解の機会は非常に重要であり、多くの大学が学生支援の一環としても取り入れている。

一方で、短期大学では4年制大学に比べ学生の在籍期間が2年間と短く、特にA短期大学は資格取得のための保育園や幼稚園、施設などでの実習が多く、実習や日々の学生生活が円滑に進むための現実的な検討を行っていくことが優先される。そのため、心理的支援においても学生のパーソナリティの深部について検討するような介入よりも現実的な解決志向型の介入が多く行われる（伊東, 2018）。

しかし、その中でもA短期大学の学生の多くが、自分を意識して働くことが重要であることを認識し、自己理解の有用性を理解していることが本調査により明らかとなった。これは、心理職などの専門家による特別な介入によるものではなく、授業や実習などの様々な場面において自己理解の重要性を理解する機会があったのだと考えられる。

A短期大学ではクラス制をとっており、クラス

単位で活動することも多い。そのため、クラスというコミュニティにおいて自分がどのような立場にいるのか、どのように付き合っていけばよいのかなど、“コミュニティと自分”の関係を検討する機会が自然ともたらされる。親密な友人関係を求める中学高校の時とは異なり、自己実現を目指すようになる青年期の学生にとってこれは自己理解の大きな機会となる。

また、担任制であり、各クラスには担任教員がいる。さらに、実習の際には学生一人ひとりに担当教員がつき、事前準備や振り返りなどのサポート体制が整っている。そのため、学生は学生生活や実習先での困り事や不安などを気軽に相談することができ、各教員がそれに丁寧に熱心に答えていく。そのようなやりとりの中で、学生は自分自身の特徴に気づいたり、環境との付き合い方などを身につけていったりするのである。教員との日常的なやりとりが学生の自己理解を促進する機会となっているのである。

この他に、「自己実現ノート（学修ポートフォリオ）」の活用もある。学業と学生生活における具体的な課題の達成状況を評価・記録することにより、自分自身を振り返りながら、自己理解することにつながるのである。

つまり、A短期大学では、日常的な学生生活の中で自己理解の重要性を認識する機会が多くあり、自己理解についての心理教育など専門的な介入を行わずとも、学生自身が自己理解の有用性を理解しているのであると考えられる。このように、自己理解の有用性を理解している学生に、エゴグラムなどの専門的なツールを用いて自己理解をさらに促進することは、意識変化や動機づけなどにより高い効果が期待できると考えられる。

V. 今後の展望

本研究においては自由記述式による質的なデータに基づき分析を行った。今後は質問紙調査による定量的データに基づいた研究も並行して行っていきたい。

また、自分に合った環境で自己実現を達成しながら働くことは保育者自身の離職予防へとつながる。さらに、自己実現を達成し、生きいきと働く保育者に保育されることは、保育される側の子どもたちに非常に良い影響をもたらす。そのため、保育者の養成課程において、就業後の保育者自身の自己実現の達成が可能となるような支援を行っていくことは非常に意義深いことである。

今後、保育者養成において、どのような学生支援が行われることが就業後の保育者の自己実現につながっていくのかについて多くの研究・検討が行われることが望まれる。

VI. 倫理的配慮

本論文の執筆にあたり、論文執筆の目的は保育者養成における自己理解の心理教育実践についての検討である旨を本学の心理学担当教授に伝え、許可をもらい、調査を行った。また、学生には調査への協力は任意であり、協力の有無が成績評価へは一切影響しないことを書面と口頭にて伝え、同意の得られた学生を調査対象者とした。さらに、個人情報の管理は厳重に行い、情報漏洩がないよう十分に注意をした。

引用・参考文献

- (1) 伊東里容 2018 年 短期大学における学生の心理的支援についての検討—学生相談室としての役割— 小池学園研究紀要 16 巻 p.159-p.163
- (2) 後藤守・後藤恵美子・金澤克美・高久宏一 2001 年 これからの保育に求められる保育者像に関する臨床心理学的研究 北海道教育大学紀要 51 巻 p.53-p.61
- (3) 高村和代、安藤史高、小平英志 保育のためのやさしい教育心理学 2009 年 ナカニシヤ出版

伊東里容 (埼玉東萌短期大学非常勤講師)